

〔研究ノート〕

凡人への讃歌

——近代日本のエリート文化をめぐって——

高 田 里 恵 子

はじめに——「ねじくれ」がもう一度「ねじくれ」るとき

近代日本のエリート、あるいはエリート文化には奇妙な「ねじくれ」が感じられる。ただし、これはすでにたびたび指摘されてきていることであり、筆者自身もすでにいくつかの考察を提出してきた¹⁾。つまり、日本のエリートが学歴エリートであり、勉強と受験での勝利によってその地位を得たにもかかわらず（「ねじくれ」の視点から言えば、むしろだからこそ）、一旦エリート校に入ったあとは、いかに学校の勉強をしないかが差異化戦略として重要になってくるという、それ自体としてはいささか陳腐な現象である。

典型例を挙げておこう。戦前のエリート校の代表である旧制高校、そのなかの頂点に立つと言われた第一高等学校（現・東京大学教養学部）のようすを、一九七六年の『週刊文春』に載った「昭和十八年一高卒=東大入学組」という記事から見てみる。これは高校を繰り上げ卒業し、大学から学徒出陣した世代にあたる。最悪の時代の学生である彼らも、「学校の勉

キーワード：旧制第一高等学校，教養主義，藤村操，安倍能成，「偉大なる凡人」

強をするのは恥」で、むしろ「びりに近い方は、低空飛行をしながら不時着しないでいられるのはなかなか大物」とかえって尊敬されたという呑気な話を伝える²⁾。

もう一例、昭和改元期の第三高等学校（現・京都大学総合人間学部）に在学した者はこう言う。「しかし学校の勉強をしなかったのは、何も僕だけではない。勉強優秀な二、三の諸君をのぞいては殆んどクラスの皆がそうだった。その証拠に、僕の親友のある男で、いつもクラスの底辺あたりをうろついていた男があったが、この男が何を思ったか、突然或る学期の試験前一週間ほど猛烈に勉強した。結果は靦面、一躍五、六番に躍進したのである。もってクラスの連中が殆んど皆、学校の授業をさぼっていたかということは明瞭である。その男は、「ああこれで安心した」と言って、次の学期から再びクラスの底辺を低迷したことは申すまでもない。〔中略〕しかし、当時唯一の洋書店であった丸善から英語の小説を買ってきては、割によく読んだと思う。学校でならった英語の教科書もそれぞれ面白そうだったが、その方はあまり読まないで、自分勝手に選んだ本ばかり読んだのは、どういう心理状態だったのだろうか³⁾。

20世紀の前半50年間続いた教養主義はエリート学生文化の代表格であるが、哲学や文学の読書が「学校の勉強」を超える特権的行為と見なされたことを考えると、教養主義は決してまじめなエリートの勉強文化ではなかった。まじめが一回転「ねじくれ」たエリート文化なのである。

戦後日本が豊かになりはじめる1950年代後半ごろから、エリート学生たちも、読書以外の行為によって、あるいは重苦しくない（キャンノンではない、サブカルチャー的な）読書によって、脱学校・脱勉強を目指しはじめる。これはもちろん、反教養主義的な遊び文化であろうが、と同時に、「学校の勉強」をしないという点では教養主義の親戚であり、やがて1980年代の軽やかなニューアカ、ポストモダン・ブームへとつながっていく。

凡人への讃歌

また、1920年代初頭から1960年代後半まで一貫して、反体制的な思想もしくは行動のなかに脱学校を求めるエリート学生群は、数は多くないにしろ、必ず存在した。彼らは、非政治的に見える教養主義には批判的であったが、その脱学校の心情から見れば、やはり教養主義の親戚、それもかなり近い親戚であった。

学生文化の本当の変化、つまり「学校の勉強」をするという現象の登場は、1990年代の初めころからと考えられているようだ。そこには、長く続くことになる経済の低成長や社会の不安定化、アメリカの大学を範とする大学教育改革の影響を見てとることができる。社会学者の岩田弘三は、「意識調査の上では、確かに「まじめ勉強文化」が一九九〇年代初め以降、復活傾向にあるとはいえ、それ以前のものとは異なり、教養主義の要素を削ぎ落した、新たな「まじめ勉強文化」だということになる」と指摘する。この新しい「まじめ」さは「今どきの学生風に言えば、いわゆる「役に立つ」学問」に関わることであり⁴⁾、国家の役に立つ人材となるべきエリート学生たちが役に立たない虚学のカッコよさを求めた教養主義とは「異なる」と言うより、むしろ正反対に位置する⁵⁾。

現代では、いわゆるエリート校に通う学生たちのなかに、奇妙な「ねじくれ」はほぼ見られなくなった。教育社会学者の荻谷剛彦は、90年代の東京大学文科系学生について「レジャーランドのダブルスクール族」という表現を使ってみせる。選抜度が高い大学の学生が必ずしも「学校の勉強」を一生懸命にするわけではなく、それどころか、入学が難しい大学ほど、授業出席率は悪くなる傾向があり、今世紀に入ってもそれは続いているという。荻谷はこれを、日本の大学をめぐる「^{エニグマ}謎」の一つと見るが、わたしたちの論から見れば、むしろ「伝統」とでも呼んだほうがいいのかも示れない⁶⁾。

重大な変化と思われるのは、「学校の勉強」をしない、いわゆるエリー

ト校の文系学生たちが、資格や公務員試験などに通じる、「役に立つ」ものを学ぶためにダブルスクールをする状況であろう。こうして、「ねじくれ」たエリート文化は、世紀転換期の失われた20年のあいだに消え去ったのである。

この現状をまずは確認しておかねばなるまい。しかし、本稿で見ていくのは、はるか昔の「ねじくれ」の時代のほうである。もっとも、考察の対象となるのは「ねじくれ」そのものではない。注目したいのは、「ねじくれ」エリート文化が「ねじくれ」を反省する視点をも内包していたことだ。

わたしたちが見ていくのは、「ねじくれ」に反発する姿、そして、やがて青春時代を過ぎた後に「ねじくれ」を反省する姿である。これらの、言わば反「ねじくれ」から眺めると、より鮮やかに「ねじくれ」の性質を描きだせると思うのである。

偉大なる凡人主義

教養主義誕生の地はすでに明確に定められている。1903（明治36）年5月、一高生で当時16歳だった藤村操（1886～1903）は「人生不可解」なる遺書の言葉を残して華厳の滝に身を投げた。この良家の少年はひょっとすると、エリート校における「学校の勉強」をしないことの実行者第一号だったのかもしれない。藤村の叔父、歴史学者那珂道世は藤村操の哲学少年ぶりを「学校の科目は、力を用うるほどの事にも非ずとて、専ら哲学宗教学美術等の書を研究して居たりし」とあらわしている⁷⁾。

よく知られているように、藤村周辺の一高生たち、阿部次郎（1883～1959）、岩波茂雄（1881～1946）、安倍能成（1883～1966）、野上豊一郎（1883～1950）、魚住影雄（1883～1910）、そしてやや年少だが、魚住の中学の後輩和辻哲郎（1889～1960）らが、当時の一高のなかに、「哲学宗教学美術」への愛好をもちこむ。とは言え、教養主義はまだ主要な学生文

凡人への讃歌

化と言えるほどの勢力を有してはいなかったが、大正初期中期、彼らが読者から書き手へと変身し、主に岩波書店から本を出版することによって大正教養主義（のちの呼び名だが）を唱導していく。

しかし、まずここで紹介したいのは、こうした著名な大正教養主義者たちではなく、藤村操と同年の人物、河合良成（1886～1970）である。

河合良成は、第四高等学校・東京帝国大学法科大学を卒業後、農商務官僚などを経て、戦後は吉田茂内閣の厚生大臣を務め、最後は小松製作所の社長となったので、世間的に言えば、さまざまな分野で出世を果たしたエリート中のエリートということになるろうか。1925年の『実業之日本』では「昇進の早い人」として、1964年の『財界』では「インテリ怪物 晩年の野望」という表題のもとで紹介されている。亡くなった時の追悼記事の見出しには、最高の褒め言葉として「非凡の凡人」という表現が掲げられている⁸⁾。

河合の自伝『明治の一青年像』によると、河合は東京帝国大学に入ってから、ひどい憂鬱、というかコンプレックスに見舞われたという。

四高に首席で入学した河合は一高出身の法科大学生にライバル意識もっていた。それは、当時の高校受験の制度のせいである。河合の高校受験のころ、1902（明治35）年から1907（明治40）年まで、高校は共通試験・総合選抜方式を採っていた。高校の受験生はみな同じ試験を受け、志望と点数によって振り分けられるので、第一志望に落ち第二志望には合格するというケースもあった。帝大自体にはまだ入学試験がなかったから、比較的簡単な高校に入ってそこから帝大に行けることにもなり、その不公平を是正するために導入された入試方法だったのだが、高校に序列をつける結果となったのである。

はじめから四高が第一志望であった河合は、「一高志望者が四高にふりあてられたために起こってくる一高への過当憧憬」が四高の雰囲気壊し

ていることに怒りを感じていた。他方、自分自身も一高や東京を妙に過大評価し、「必ずかれらをやっつけようという勇猛心」をもって上京したのだった。

しかし一高出身者が勉学の面で特に優れていることもなく、それどころか、数を頼んで「二、三十名も連合して、そして講義の最も聴きとり易い前の方のところに、朝早くから予めノートを置いて席を占めて置くというようなことを、毎朝やられたのである」。

当時、卒業時の席次や高等文官試験の席次が就職において重要な意味をもち、また高等文官試験の問題は東京帝大の教師が作成したので、講義をよく聴いておく、正確に言えば筆記しておくことが大事であったらしい。

河合は一高出身者たちの卑劣さに憤慨する。この辺には「学校の勉強」をしないというダンディズムは見られず、百年後の「ダブルスクール族」に近い。実際のところ、高等学校での席次は将来の出世には関係なかったが、東京帝国大学法科大学にでも進めば、今度は、官僚になるための真剣な席次争いがあったようである。

河合は、同じ一高出身でも、「平々淡々たる顔をして、この有様を黙って見ていた」藤井武（1888～1930・1904年一高入学）と親しくなる。藤井は法科大学卒業後に勤めた内務省を四年足らずで辞め、内村鑑三の無教会主義キリスト教の伝道師に転身した変わり種である。現在でも岩波書店から藤井武全集が出ているが、当時も岩波茂雄が、おそらくそうは売れないであろう藤井の本を引きうけた。内村鑑三や岩波茂雄という名前からもわかるように、藤井もまた一高教養主義を代表する人物である。

河合良成も、英知と真心にあふれた藤井武との出会いを懐かしく振りかえる。ところが一方で、「この藤井君や笠間〔杲雄〕君との交友から、私は自信喪失、強度のコンプレックスを感じはじめるのである」。

笠間杲雄（1885～1945）は、まさに一高で藤村操や安倍能成と同級で

凡人への讃歌

あった。安倍は一高時代の笠間の文才を高く買って文芸部に推薦している。安倍の自伝では、「笠間梶雄は英語をよくし、和漢の文字も珍しく心得て、和歌と漢詩とを〔一高の『校友会雑誌』に〕発表する才人であったが、戦争中外交官として敵の魚雷を受け、海中の藻屑となった」と、その悲運の死が深く悼まれている⁹⁾。

なぜ河合は強度のコンプレックスに苦しむことになったのだろうか。

すでに、一高時代のエピソードからもわかるように、藤井や笠間は「欧州各国の文学や思想や哲学などに」通じ、「学校の勉強」を超えた才能を有していた。彼らの教養に満ちた会話は、一晩中でも続いたという。しかし河合は彼らの話についていけない。「僕はその傍らで八時間殆んど唾同様であった」。「生まれてからこれ位恥しく感じ、悲しく感じたことはない。寝に就いてからも涙しきりに衾を濡らした」と河合は当時の日記を引用してみせる。

しかし年明けて、1908（明治41）年の元旦には「凡識ならば凡識にて良し。凡識に異彩あらしめよ」と自分を励まし、それを四高時代の恩師である西田幾多郎（1870～1945）に書き送ったらしく、西田から、こんな書き出しの手紙を受けとっている。

拝啓、今度の御手紙の趣一々大賛成に御座候。特に偉大なる凡人主義は賛成に候。君は独歩の運命を読みしや。何卒此心を変せず折角御勉学の程奉祈候¹⁰⁾。

西田幾多郎は、やがて『善の研究』（1911）とともに、旧制高校生の教養主義的読書を支えてしまう一人となるが、まだこの著作を世に問う前の、しがない四高教師であった。

國木田独歩の短篇集『運命』は1906（明治39）年に出版されているが、

西田が言及しているのは、そのなかに収められた「非凡なる凡人」であると思われる。

「非凡なる凡人」は、東京遊学中の恵まれた境遇の若者が幼馴染の桂正作について仲間たちに語るという形式をもつ。語り手は中学校に進学したが、桂正作は、もともとは士族だった家が傾いたために中学に進めないまま実社会に出た。しかし腐ることなく、「独立自活して」自分のお金で工手学校の夜間部に通い、電気工事の技手となり、会社からもらう乏しい給料のなかから弟たちを援助し、創意工夫で生活を楽しみつつ、日々勉強を忘れない。「彼ほど虚栄心の少ない男は珍しい。其の境遇に処し、その信ずる処を行なうて、それで満足し安心し、そして勉励している。彼はけっして自分と他人とを比較しない。自分は自分だけのことをなして、運命に安んじて、そして運命を開拓しつつ進んでゆく」。

電信柱の器械の不具合を黙々と修理する桂正作の姿を見ているうちに、語り手は「一種の莊嚴に打たれた」と報告して話は終わる¹¹⁾。

国文学者の関肇は、「非凡なる凡人」の文学的価値はひとまず措くとして、当時の「青年たちの沈滞した意識」に働きかけたであろう桂正作の形姿をこうまとめている。「国家価値に追従することなく、また社会から逸脱することもなしに、規範の内部に身を置きながら「有為の精神」をもって自立していく桂正作の姿¹²⁾」。

「非凡なる凡人」は1903年3月に『中学世界』に発表されている。その二か月後に華嚴の滝事件が起きたわけである。藤村操の自殺が、当時の「煩悶青年」と呼ばれたエリート青年たちに多大な影響を及ぼしたことはしばしば言及されてきた。要するに、この時期、いかに生きるか、といった新しい問題に若者が直面したというのである。藤村操と桂正作は対照的であるように見えるが、若者に対して生き方を提示しているという点では、よく似ているだろう。

立身出世の凡庸さについて

先ほどから問題にしている1900年前後（明治30年代）が近代日本の転換期であったことも、しばしば指摘されてきた。とりわけ若い世代の変化が取り沙汰され、その一つとして、立身出世に重きを置かない「煩悶青年」の登場が挙げられるわけだ。近代国家としての諸制度がようやく整ったとき、かえって青年たちの心に暗い閉塞感がもたらされたというのである。

このエリート青年たちの立身出世拒否の話で定番の引用となるのが、藤村操より一年先輩の岩波茂雄の、いくぶん大袈裟な言葉だ。岩波は1900年ころの一高の雰囲気をこう伝えている。「立身出世、功名富貴が如き言葉は男子として口にするを恥じ、永遠の生命をつかみ人生の根本義に徹するためには死も厭わずという時代であつた」。だからこそ、藤村操の自殺が「我々憧憬の目標」となったのだと¹³⁾。

学歴による立身出世を代表する学校でこそ、立身出世が軽侮されるのは想像しにくいことではあるまい。学歴エリートコースが明確に整備されたとき、それに乗ることがそう難しくない若い男性にとっては、むしろそれを選択できなくなったのだ。無論、とどのつまりは選択するのだから、屈託なく朗らかに選択できなくなったと言うべきか。

しかし注目したいのは、既成のコースに乗っただけの出世を志の低い人間のものと見なす考え方である。岩波茂雄が非難しているのは、こうした「立身出世、功名富貴」であろう。とりわけ明治初期の乱世を生きた前の世代の人間から、現代青年の気概の無さが非難される。1902年3月（つまり岩波の在学中）、一高の「興風会校風談話会」に呼ばれた東京帝国大学総長山川健次郎（1854～1931）は、いまの学生の問題の第一として「其理想の低き事」を挙げる。「今の書生の多くの志す所は、早く卒業して政府の役人にならんことを望み、或は会社の重役たらんことを期する様、暗々

裡に見ゆ」¹⁴⁾。

日本思想史家の坂本多加雄は、山路愛山(1865~1917)、徳富蘇峰(1863~1957)、田岡嶺雲(1870~1912)、陸羯南(1857~1907)、三宅雪嶺(1860~1945)などの在野のジャーナリストたち、坂本の言葉を使うと「明治三十年代の論者」たちが、この「秩序の時代」における「社会のエリートないしエリート志望層の心性の「官僚化」を深く憂慮していたことを指摘する。自主独立と創業の気持ちを失い、官庁や大会社から給料をもらっての安定した生活しか望んでいない。そこでは、武士の気をもつ英雄や指導者ではなく、「小廉曲謹の人」(山路)や「俗才子」(田岡)が幅を利かせていると¹⁵⁾。

徳富蘆花(1868~1927)の小説『思出の記』(1900/01)の主人公は、高等中学からではない非正規のルートから帝国大学に入るが、そこには「能吏の卵、おとなしい学者の卵、渡世上手の卵、などを孵えずに至極適当な生温かな空気が満ち満ちているように覚え」、大いに失望する。「これでは国士の養成所ではなくて気概ある論者が「曲学阿世の本場、俗吏製造所」などと罵詈するのまんざら否とはいわれない、と思うこともあった」¹⁶⁾。

つまり、1900年前後にエリートコースがはっきり見えてきたと同時に、いまでもよく聞くエリート批判の言葉はもう出揃っていたわけである。ただし、これはポピュリズム的なエリートへの憎悪の表明ではもちろんなく、志の低い出世主義者を生み出すエリートコースにたいする批判であった。

とまれ、このような一種のダブルバインド状態ではエリート青年たちが多少「ねじくれ」ても当然かもしれない。若いエリートたちが立身出世主義を拒否したというより、先行世代が、立身出世に汲汲とするのは凡人の証と言わんばかりに、若者たちを痛めつけたようにしか見えない。

藤村操の同級生で、「煩悶」のため落第してきた岩波茂雄とも同級になっ

凡人への讃歌

た安倍能成がやがて一高の校長として、1943年の入学式式辞のなかで、「言論に於いて出世主義の否定せられること今日の如く甚だしきはなく、しかも事実¹⁷に於いて出世主義者の跳梁することまた今日の如く甚だしきはない。私は世の偽善者達の如く徒らに出世の欲望を否定するものではないが、しかし出世して世に時めくということは竟に最高の理想ではない」¹⁷と述べているのは率直であり、エリート青年たちの心にも届いたのではないかと思われる。出世主義の表面的な否定がどうやらずっと続いていたらしいこともわかる。そして、これが教養主義の「ねじくれ」の一つの背景であった。

成熟と凡庸

安倍能成は、阿部次郎や和辻哲郎などとは違って教養主義を代表するような著作をもたなかったが、その率直な性格のおかげか、雑誌や全集のまとめ役を務めたり、特に戦後はさまざまな文化人の集まりの長となったりして、大正教養主義者たちのなかで中心的な位置を占めている。また、岩波茂雄との深い友情、藤村操の妹との結婚、1940年からの5年間という最も困難な時期に務めた一高校長としての名声も、教養主義者・安倍能成の存在を際立たせるだろう。

安倍もまた、「学校の勉強」からの離脱を繰り返しかえし自伝などで語っている。「学校の学課を勉強するよりも、自分の読もうと欲するものを読むのが大切だと思い、学校を休んで図書館に通うのを得意とし」¹⁸ているうちに¹⁸、安倍は高校2年生の時に落第してしまうのだが、その契機となったのが親友藤村の死であった。しかも影響は安倍だけに留まるものではなかったという。

「人生に煩悶する」というのが当時の多感な青年の流行になった。それ以来「定められたるを定められたる如くする」のが真面目ではないとい

う考えから、学校の課業を怠り、自分の読みたいものを読み、自分のしたいことをするのがいいという気分が、私を支配したのみならず、二年になってから同級にもその風が拡がり、私の組の主任だったドイツ語の保志虎吉先生は、或る時、この組は一年の時は成績が良かったのに、どうもこの頃はだらけて来た、注意してもらいたいといわれた¹⁹⁾。

藤村操の自殺直後の1903年6月に発行された校内雑誌には、藤村への哀悼の辞があふれているが、ここでは藤村は、安倍の言葉を借りれば、「塵世の汚濁に染まず、玉の如くうるわしく、雪の如く清かりし君」といった、若い純粹さの塊として描かれている。「君は偽れる世の人に真なれとの警告を与えんとの使命をうけて、この世に生まれしにはあらざるか²⁰⁾。

ただし、わたしたちが目にするのは、安倍能成がやがて年老いたときに、自分の思いあがった振舞いを回顧する姿である。藤村操は本当に純粹無垢だったのか。虚栄はなかったのか。「だからつまり少年らしい名誉心が非常にあったと、私は思うんです。自分は初めは理想化して考えていたが、だんだんそう考えるようになりました」と、80歳近くになって安倍は振り返っている²¹⁾。

すでに述べたように、「ねじくれた」エリート文化、「学校の勉強」をしないという教養主義は、藤村操周辺の一高生たち（のちの大正教養主義者たち）からはじまった。そして彼らは、ある意味で若い反逆者であった。権威にも楯突いた。そのことをよく伝えているのが、1915年の「哲学叢書」の創刊にまつわるエピソードであろう。1913年に創業したばかりの弱小出版社岩波書店が、当時はまだ定職もなかった若い学者たち（たとえば「両アペ」）に本を書かせた。これがヒットし、岩波教養主義の基盤ができる。業界を牛耳る権威者に頼らず、若い人間たちが自分の実力で新しい読者を得ようとした、と岩波茂雄は振り返る。

「つまり哲学といえ、当時は井上哲次郎、中島力造、その方の専門で、

凡人への讃歌

少くともその方の序文がなければ本が売れなかったくらいの時勢だった。そこへもって来て新進気鋭の士が、そういう風潮に反抗したというか、一般的に哲学の教養を与えることが必要だと思うという立場から、実力を以て問おうということからやった。〔中略〕〔若い著者たちは〕少しも知られて居なかった。今日では大学の教授になって居るが、そんな連中が皆寄ってやろうじゃないかという訳だった²²⁾。

若かった反逆者たちも、1930年代中ごろから敗戦後へと続く昭和期教養主義の時代には、押しも押されもせぬエスタブリッシュメントとなり、戦後民主主義社会のなかで批判と軽侮を込めてオールド・リベラリストなどと呼ばれる保守主義者と見なされた。

そのような落ちついた年齢になったとき、「学校の勉強」をしないという「ねじくれ」ぶりが、安倍能成によってこんなふうに戻されていく。「学課をなまけて居ても、何もして居なかったわけではなかったが、それは落第してから岩元先生にいわれた如く、「君のやることは天才のやること」であって、最も天才に遠い私に不適當極まって居たことは、争われないうちである²³⁾。

岩元（禎）先生とは、漱石の『三四郎』（1908）に登場する「偉大なる暗闇」こと「広田先生」のモデルと言われている一高ドイツ語教師である。気難しい変人であったらしいが、若者の自己特権視を宥めるようすは、いかにもエリート校の教師にふさわしい。実際、年長の識者のなかには、藤村の自己特権視を批判する者も少なからず存在した²⁴⁾。

安倍能成や藤村操より一年先輩の阿部次郎、大正教養主義を代表する『三太郎の日記』（1914）の作者は、「学校の勉強」をしないことで、そして圧倒的な読書量で学友たちの尊敬を得ていたようである。やはり、「学校の勉強」をしないことが教養主義の原点なのである。

まずは、安倍の思い出記から。「〔阿部と〕同じ組には秀才の誉れ高かつ

た鳩山秀夫があり、鳩山は常に首席で、阿部は二番だったが、阿部は教場ではよく居眠りをして居て、試験勉強もしないで、この席次を失わないのが、皆から羨まれて居た」²⁵⁾。もう一つは、同級生の証言を引こう。「学校の図書室へは、君は能く通った。然し君のは直接学科の勉強の為にはせぬ方で、自分の好きな書物を選んで読んで居たようだ。とにかく読書力は儕輩中の白眉ともいうべきものであった。そして読み耽って、時の経つのを弁せぬといった様でもあった」²⁶⁾。

しかし例のごとく、わたしたちにとって問題となるのは、年齢を重ねた阿部次郎の反省である。1930年代後半、昭和の厳しい季節のなかで教養主義がよみがえる。阿部は、その名も「教養の問題」という論考のなかで、「学校の勉強」を軽んじるなど忠告する。少し長く引用してみよう。

私自身のことを懺悔すれば、私は今私の考察せむとする問題の範囲によって、私が生徒や学生として課せられたあらゆる智識が、準備の程度においては悉く必要であることを感ずる。しかるに私は中学においては理化や博物の課業を怠り、高等学校においては法律や経済や高等数学を軽蔑し、大学においては冬の日の早起きがつらかったままに仏蘭西語の課業を中絶した。そうしてこれらすべての怠慢が現に自分に祟りつつあることを痛感し、再び学生の心に還ってこれらの欠陥を補おうと心掛けながらも、この志が容易に遂げ得ぬことを嘆いていなければならないのである。故に私は私自身の失敗に照らして学生諸君に忠告する——学生は学校が必要として我々に課する学課を、すべて他日必要になるものと信じて普通にこれを遣っておくぐらゐの素直さを持っていなければならぬ、諸君が順当にそれぞれの途において成長して行くならば、それは実際、諸君にとって必要なものとなるであろう。こういうのはもとより学校における今日の教え方を悉く是認するという意味ではない。準備の広さにとって必要なのは、その

凡人への讃歌

学課の根本問題である、精髓である、通観である²⁷⁾。(傍点原文)

『三太郎の日記』などの古い教養主義的な書物が、敗戦後、大正教養主義時代よりも、むしろ多いくらいの若い読者を魅きつけたことはしばしば指摘される。『善の研究』を買うために、若者たちが夜中から行列をつくって岩波書店のまわりで待ちわびていたといった話もあるくらいだ。

哲学者の古在由重(1991～90)は、戦後の若者たちの(再)教養主義化に嫌悪感をあらわし、「青春の古典」たる書物について、「個人の成長とともにくりかえしてよまれる部類のものではない。やがて成長する個人にわすれられてしまうようなものである」²⁸⁾と述べている。

厳しい批判のように思えるが、これほど見事に、大正教養主義者そのものの、凡人への「成長」あるいは「成熟」をあらわしているものはない。

注

- 1) たとえば、高田里恵子「学校の勉強なんかしない——男の特権?」『応用倫理——理論と実践の架橋』vol. 10 別冊(「教養とジェンダー」)(北海道大学大学院文学研究科応用倫理研究教育センター発行、2018)を参照されたい。
- 2) 「昭和十八年一高卒=東大入学組かつて光クラブ・山崎晃嗣もいて、いま大蔵・通算・経企庁の官房長を独占する“超エリート”群像」『週刊文春』1976年9月30日号、44頁。
- 3) 大西芳雄「よき時代のよき先生方」三高同窓會編『會報』26号(1964)4頁。
- 4) 岩田弘三「キャンパス文化の変容」稲垣恭子編『教育文化を学ぶ人のために』(社会思想社、2011)52～53頁。および「勉強文化と遊び文化の盛衰」武内清編『キャンパスライフの今』(玉川大学出版部、2003)199頁参照。
- 5) 現代の大学の教室に見られる一つの風景として挙げておきたいのは、「学校の勉強」をしないことを掲げる旧世代の教師と、現代の学生たちのあいだに見られる喜劇的な断裂である。哲学者の國分功一郎は2014年にこんなふう言っている。「私や白井〔聡〕さんは政治経済研究会という勉強会サーク

- ルに入っていて、大学の授業にはまったく出席せずに勉強していました。そこでマルクスもプラトンもルソーもホブスも読んだ。しかし、そのモデルを今の学生に適用することはできません。確かに今の学生はそういう仕方でも勉強するのは苦手です。[中略]ある世代の教員は、学生に「不良であれ」というようなことを言っている。「授業なんて出るな」と言う人もいます。最低だと思います」。國分功一郎・白井聡「教員は働きたいのであって、働くフリをしたいのではない」『現代思想』第42巻14号（2014）40頁。
- 6) 荻谷剛彦『アメリカの大学・ニッポンの大学』（玉川大学出版部，1992）のIV「レジャーランドのダブルスクール族」156～171頁，及び「高等教育システムの階層性——日本の大学の謎」濱中淳子編『大衆化する大学——学生の多様化をどうみるか』（岩波書店，2013）163～193頁を参照されたい。
 - 7) 「那珂博士の甥華嚴の瀑に死す」『万朝報』1903年5月26日号
 - 8) 「非凡の凡人 故河合良成氏を偲んで」『土地住宅総合研究』第26号（1971）63～67頁。
 - 9) 安倍能成『我が生ひ立ち』（岩波書店，1966）478頁。
 - 10) 以上の引用は、河合良成『明治の一青年像』（講談社，1969）「東京大学時代」148～227頁より。なお、西田幾多郎の河合良成宛手紙（書簡番号71）の全文は、『西田幾多郎全集』第18巻（岩波書店，1953）91～92頁。
 - 11) 國木田独歩「非凡なる凡人」『定本 國木田独歩全集』第3巻（学習研究社，1964）137頁。
 - 12) 関肇『新聞小説の時代：メディア・読者・メロドラマ』（新曜社，2007）326頁。
 - 13) 岩波茂雄『岩波茂雄：茂雄遺文抄』（日本図書センター，1998）36～37頁。
 - 14) 「興風会校風談話会」『校友会雑誌』115号（1902）21頁。
 - 15) 坂本多加雄「独立・官吏・創業：明治政治思想史における「政治家」と「官僚」」「市場・道徳・秩序」（ちくま学芸文庫版，2007）295頁。
 - 16) 徳富蘆花『思出の記（下）』（岩波文庫版，1988）153頁。
 - 17) 安倍能成「高校生に与う：世の塩たれ」『戦中戦後』（白日書院，1946）19頁。（初出1943年4月7日・8日）
 - 18) 安倍『我が生ひ立ち』474頁。
 - 19) 安倍「落第と落第の前」辰野隆編『落第読本』（鱒書房，1955）17頁。

凡人への讃歌

- 20) 安倍「藤村操君を憶う」『校友会雑誌』128号（1903）72頁。
- 21) 安倍能成・勝本清一郎・唐木順三・竹山道雄「大正の精神史（下）」『自由』第3巻10号（至誠堂，1961）100頁。
- 22) 「岩波茂雄先生を囲む座談会」（1943年9月19日及21日）『岩波茂雄文集3』（岩波書店，2017）291頁。
- 23) 安倍『我が生ひ立ち』352頁。
- 24) たとえば、帝国大学第二代総長を務めた加藤弘之（1836～1916）は次のように言っている。「況や十七や十八歳の少年が、僅かばかりの研究をして、其れで早くも人生は不可解と断じて、あたらず有為の身を自ら殺す杯とは、実に寧ろ生意気、否狂気の沙汰たるを免れ得ない」。
- さらに、「学校の勉強」を疎かにする傾向についても触れている。
- 「今日の教育家は常に、教育は所謂詰込主義では不可ない、生徒をして其学ぶところを能く消化せしむる様に為なければならない、と言うて居る、これ一応甚だ道理の如く思われるが、併し此が抑も謬見と言う可きもので、余輩は何処迄も詰込主義——最も過度では不可ないが、適当に為る時は或程度迄は、却て此主義、換言すれば即ち唯だ学ぶと言う方が宜い」。加藤弘之「青年と哲学」『成功』第2巻第5号（1903）23～24頁。
- また、当時の一高教師（のちに校長）菊池寿人は、1903年5月27日の日記に「教場などにてはおとなしけれど元気乏しく、真摯無邪気ならず、小面憎き事ありと受持教授はいう」という記述を残している。菊池寿人『杏蔭日記』（菊池寿人杏蔭日記刊行会，1988）180頁。
- 25) 安倍『我が生ひ立ち』477頁。
- 26) 工藤壮平「高等学校時代の阿部君」阿部次郎先生還暦祝賀記念刊行会編『阿部先生の横顔』（1948）13頁。
- 27) 阿部次郎「教養の問題」谷川徹三・阿部知二編『教養と人生』（社会思想社，1951）24頁。この論考は1937年に出版された『学生と生活』に入っている。これは、河合栄治郎の編集でベストセラーとなり、昭和期教養主義の中心的役割を果たした『学生叢書』の一冊である。
- 28) 古在由重「忘れらるべき書：歴史的現実から目をそむけた内省の書にすぎない」『青春の古典』『日本読書新聞』第574号（1951年1月1日）第4面。